

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-16

「忙しい2日間だったけれど、とても有意義で充実した時間を送ることができた。いやあ～、あなたの見事な手際には参った。たいしたもんだ」と辰巳は画廊の前でタクシーに乗り込む前、真紀に手を差し伸べて言った。

辰巳の乗ったタクシーが見えなくなるまで見送っていた真紀は、隣に立っている朝倉に深々と頭を下げた。「連休なのに無理を聞いて頂きありがとうございました。本当に助かりました。これでどうにか朝倉さんにも義理を果たせそうです」

「当方としても『H美術館』と取引できることになれば、信用や実績の面でプラスになります。こんなところで立ち話もなんですが、そうなった時の取り分は50%ということですのでよろしいですね」と朝倉はふいに言って、かすかに微笑んだ。

「よろしく願いいたします」と真紀は頷きながら言った。

連休明けのこともあって、『こはる』は開店の8時を1時間ほど過ぎると、予約の客で席の半分は埋まっていた。

真紀は大御所俳優のTが連れてきた映画プロデューサーの席についていた。

3年前に制作予定だった『人情紙風船』はクラクイン直前に中止となった。

スタッフや出演者たちもスケジュールを空けていたので、ペナルティーを含め取り沙汰されたが、真相は外部に漏れることなく立ち消えになった。

今のTは役者に専念することで失地回復を図るしかなかった。

Tが日韓合作映画に準主役として出演することになった経緯などを話していると、店のマネージャーが洗練された振る舞いで真紀に紙片を渡した。そこには長野から来た堀内と名乗る女性が真紀を訪ねてきているのがメモ書きされていた。

真紀は書かれている内容に目を疑ったが、さり気なく代わりのホステスを呼んでもらうと店の入り口に向かった。

頭で誰かは分かっていたけれど、別世界に紛れ込んだような表情を浮かべている麻里子を間近で見た真紀は、形容しがたい感情に揺れていた。

「夢じゃないでしょうね！」と真紀は麻里子の緊張を解すように手を握り締めて言った。

「気づいたら、ここに来ていました」と麻里子は訴えて、敏感になりすぎている自分を落ち着かせようとしていた。

「とにかく、中に入って」と真紀は促して、麻里子をカウンター席に座らせた。

「私の親友なの。お願いね」と真紀は女性バーテンダーに頼んでから、「ごめんなさい。お話は後で……」と麻里子に言いかけると、

「あの、私の車を下の花屋さんに駐車させてもらっているのですが……」

「え？ウソ。車で来たの？いい度胸してるわね。移動させるからキーを渡しておいてね」と真紀は感心した顔で言った。

「何かおつくりしますか？」と女性バーテンダーが訊いた。

ナビを頼りに高速道をひた走り、やっとのことで目的地に辿り着いたせいもあって、いま

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

だに興奮冷めやらぬ麻里子は、初めて見る女性バーテンダーの凛々しい姿に気を紛らわすことができた。

「アマレットを使ったカクテルはありませんか？」と麻里子は咄嗟に口をついて出た言葉に自分で自分に驚いていた。

「ウイスキーベースのゴッドファーザーかブランデーベースのフレンチコネクションはいかがですか？」

「フレンチコネクションにしてください」と真紀は嬉しさのあまり声高に頼んでいた。

銀座で深夜営業をしている中国料理店で四川料理を食べてから、真紀の借りているマンションの7階に戻ったのは、午前2時過ぎだった。

シャワーを浴びた麻里子は、真紀のパジャマを着て居間のソファに座り、首や肩を両手で揉み解していた。

「寝酒をやりましょう」と真紀は頭タオルのままで言って、デカンターとブランデーグラスを運んできた。

「お送りした杏仁酒は、まだありますか？」

「ええ、半分ほど残っているわ」

「覚えてたほやほやですが、フレンチコネクションにしませんか？」

「やるじゃない！麻里子さん！今宵の宴にはベストセレクションだわ」

それから二人は、氷を入れたブランデーグラスで乾杯した。

「私、夢を見ているのでしょうか？ここ数日間の出来事は現実離れしていて……」と麻里子は言いよどんでから、美しい瞳を潤ませて深呼吸をした。

「人生の流れが変わる時は、潮目を見誤らないことね。これだと確信したら、身をゆだねるしかないわ。偉そうに言うけれど、生涯にそういうチャンスは二、三度しかないし、それに気づかない人が大勢いるのよ！麻里子さんには、どうしても幸せになってほしいの」と真紀は語気を強めて言った。

「何かに突き動かされて、東京のご真ん中に来てしまいました。ひょっとしたら、何かによって、チャンスの神様？だとしたら、夜明かしで酔いつぶれたい……」と麻里子は本気で言った。

「よそう。また夢になるといけねえ」と真紀は堀内昌幸が好きだった古典落語『芝浜』の“夢オチ、を真似てから、唇の端を曲げて笑った。